
時期はずれの転校生

天川りか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時期はずれの転校生

【Nコード】

N3498B

【作者名】

天川りか

【あらすじ】

時期はずれに来た転校生はいじめられていたような容姿。ある日その秘密を知ってしまい…

それはある冬の日の事だった。

この光陵学園に

転校生が来る、という噂が立ったのは。

「朔夜！お前聞いたか？転校生が来るんだって、このクラスに！」
机にうつ伏せになっている松田^{まつたさくや}朔夜に
はしやぎながらも、確かにそう神崎^{かみづきなおや}直哉は言った。

「へえー…」

一方、朔夜はその高いテンションとは
大違いの低い声で返した。

寝不足でボーっとするのはいつもの事だ。

加えて、決してノリの良くない性格。

どうして気さくな直哉と友達になったか、彼自身も疑問であった。

「なんだよーもっと喜べよー女の子だってさ！」

そう言いながら直哉はバシッと肩を叩いた。

後ろを振り向く朔夜に直哉は歯を見せて笑った。

「つてえなあ…」

眠気は覚めたが怒りは増すばかりだ。

朔夜は笑いながら逃げる直哉を追いかけた。

いつもの事だった。

そう、何もかもが。

噂の転校生が来るまでは。

光陵学園高等部 2年C組。

直哉と朔夜のクラスである。

その噂の転校生は、次の日にC組に来た。

担任の佐久間が亀と同じくらいのスローペースで教室に入ってきた。

「席付けー。今日は転校生を紹介する」

みんな“待つてました”というように騒ぎ立てる。

ああ、直哉が言っていたあれか。

朔夜は頼杖をつきながらざわつく教室を見渡した。

そつえば、今の時期に転校生なんて珍しい。

「入りなさい」

そう言われ彼女は入ってきた。

一瞬で教室が静まった。

それもそのはず、その女は

いかにも、と言っのだろうか。

いじめられていたような…失礼かもしれないが、

そんな容姿だったからだ。

ぼさぼさの長髪、俯いて顔はよく見えない。

直哉の騒いでいた女子…というのとは

ちよつと、いや、かなり違う。

「…紹介する。鳴海^{なるみあき}暁子さんだ。」

“挨拶しなさい”そう佐久間に促され

暁子は口を開いた。

「…よろしく願います」

感情のない突き刺さるような声。

しんとした教室にその声は響いた。

朔夜は唾を飲んだ。

2年C組に鳴海暁子が加わったその日は曇りだった。

まるで、先行きの不安を表すように。

暁子は明らかに孤立していた。

と言うよりも、なんとか話そうとする女子は居るのだがとにかく無言で、女子のほうが飽きて行ってしまうのだ。朔夜は別に気にとめなかった。

ただ、少しくらい乗っておけばいいのに、そう思った。

「なあ…期待はずれだったな、あの転校生」

昼休み、購買に行こうとする朔夜に直哉が寄ってきた。

朔夜は別に転校生に期待などしていなかったが、

直哉は相槌を要求するように「なっ」と言ってきた。

「まあ…女子にも色々いるしな」

「でもな…可愛い奴かと思っただぜ」

転校生って言うのはさあ、と

直哉は理想をべらべらと喋るだけ喋った。

朔夜は相槌を打つのさえも面倒臭くなり、

屋上に着く頃には完全無視だった。

屋上で昼を食べるのが彼らの日課だ。

「寂しいよなあ」とよく直哉は言う。

屋上に着き、二人はぎよつとした。

噂の鳴海暁子がそこに居たのだった。

二人はドアの陰に隠れた。

暁子はフェンス越しに町を眺めている。

ただそれだけなのだ。

しかし、先ほどの状況を見たものには自殺と言う言葉が浮かんだ。

「おい、お前…止めるよ」

「…無茶言っな」

直哉は楽しいときは率先するくせに

こういう時に無責任だ。

「俺、パス。朔夜、後は何とかしろよっ」

「頑張れよ」と付け足し、直哉は階段を駆け下りて行った。
本当に無責任だ。

朔夜も逃げたかったが、

直哉と同類になるのはなんとなくプライドが許さなかった。

朔夜はここにいても仕方ないと思って

屋上へと足を踏み入れた。

今にも雨が降りそうな天気だ。

雨が降ってしまえばいいのに、と降りそうで降らないこの天気を呪った。

出来る限り無視して、通り過ぎよう。

そして、弁当を食べよう。

正直、朔夜は彼女に関わりたくなかった。

1人作戦を練っている、ぼそぼそと声が聞こえた。

見渡しても、他に人の気配はない。

とすると、声の主はあいつしかない。

朔夜は耳を澄ました。

「……駄目でしょ……出てきちゃ……」

「ちゃんとやってるでしょ……？」

……誰と話しているんだ？

暁子は誰に話す訳でもなく、フェンスに話し掛けている。

しかもここは屋上、階で言えば5階。

下に人が居たとしても話せるわけがない。

第一そのぼそぼそ声では聞こえないだろう。

朔夜は訳が分からなかった。

と同時に、気味が悪いと思った。

「……第一、あなたが死ぬのが悪いのよ？」

死ぬのが悪い……？

ということは、相手は……

そこまで考えて、朔夜はぞっとした。

その瞬間、ドアを支えていた腕の力が抜け、
ドアが体を直撃した。

——ガンッ

朔夜は凍りついた。

意外にも音は響き、暁子が振り向いてしまったからだ。

逃げようと思ったが、

恐怖を感じるときは体が動かないもので、
朔夜はその場に立ち尽くすしかなかった。

「……こんにちは……」

朔夜はその場しのぎでそう言った。

初めて見た。

俯いていないときの顔。

思っていたよりも良かった。

少なくとも、悪くはないだろう。

「……聞いてたの……？」

動揺しているのか、暁子は

胸くらいまでのぼさぼさの髪を触りながら言った。

「……ああ」

朔夜はここで弁解するのも面倒だと思ったので
曖昧に言った。

どんな反応をするかも興味があった。

「……そう」

そついうと暁子はまた俯き、近づいてきた。

何されるんだろう。殴られるとか。

朔夜は少し後退りした。

しかし朔夜の予想とは裏腹に

暁子はすつと横を通りすぎ、階段を下りていった。

「内緒よ」

と、すれ違いざまに囁いて。

その声は殴られるよりも怖かった。

あの挨拶のときと同じ、突き刺さるような声だったから。

あれから朔夜はずっと考えていた。

話し相手の見当はつくのだから、認めたくない。

幽霊かもしれない、なんて、誰が信じるだろうか。

本人に確かめたくても、自ら話し掛ける気にはなれない。

自分が暁子と関わっている、と知られたら

何を言われるかも分からない。

特に、あの噂好きの直哉には。

そんなことを黙々と考えているうちに

あつという間に時は過ぎ、ついには下校時刻となってしまった。

次々人がいなくなる教室でボーっとしていると

直哉が背中を叩き「じゃあな」と言った。

適当に「おう」と返しておいた。

もどかしい思いのまま薄暗い教室を出た。

しばらくは悩まされそうだった。

靴を履き替えると、ふと体育倉庫が目に残った。

下駄箱からそう遠くない、小さな倉庫。

その中に、女子数人が吸い込まれていく。

なんとなく、嫌な予感がする。

そう、例えばその先頭が鳴海暁子だったりするとか。

朔夜は気になって体育倉庫に行ってみた。

流石の中には入れない。

入り口の横で様子を見ることにした。

クラスの女子の高い声が聞こえる。

「うざいんだけど。何あたたちをシカトしてんの？」

「こっちはわざわざあんたに話し掛けてやってんだから」

いろいろな罵声が飛び交っている。

嫌な予感は現実となっている気がした。

朔夜はそつと中を覗いてみた。

数人の女子の輪の中に、俯く1人の女。

紛れもなく、暁子だった。

予感は当たった。

当たらなくていい時に当たる、嫌な勘だ。

そういえばその女子は話し掛けようと試みた人達だった。

いくら反応がなかったとはいえ、呼び出して言うことでもないだろう。

一方、暁子は黙ったままのようだ。

声はもちろんのこと、反論の声が聞こえない。

暁子がどうなろうと朔夜には関係ない。

そう思いつつも、なんとなく放っておけない。

しかし何もできそうにないので、暫くここに留まることにした。

「……なんか言えて言ってんだろっ！」

暁子の態度がよほど気に入らなかったらしく、1人が怒鳴った。

朔夜は驚き、そつと中を覗いて見た。

その女子はかなり頭に血が上っているらしく、

ついに手を挙げようとしている。

朔夜は思わず目を瞑った。

その時、まさに手が上がった瞬間だった。

暁子が小さい声で何か言ったかと思うと、

バチツと火花の散るような音がして、一瞬、辺りが光に包まれた。

朔夜が感じたのは瞼を通じてだったが、

確かに一瞬、そこには人工的な光が生まれていた。

……何だっただんたろう。

「……な……何、こいつ……」

「……やばくない？行こ、早く！」

その光に女子たちが怯んだのか、一斉に出口に向かって来た。

朔夜は咄嗟に木陰に隠れ、ただ1人を除いて全員が出たことを確認すると

また倉庫の入り口に戻った。

見ると、暁子が1人で立っている。

放心しているようにも、何かを考えているようにも見えた。

「……今の、何」

朔夜は訊いた。

なぜかごく自然に言葉にしてしまった。

一方、暁子は誰かいると思ってもみなかつたらしく、ビクツと体を震わせた。

「……見てたの」

その言葉は、疑問系ではなく朔夜に向けられていなかった。

1人で「そう、見ていたの」というように、納得している様子だった。

「……知りたい？」

「え？」

「知りたいの？さっきのこと」

これには朔夜のほうが驚いた。

まさか、自ら話してくれる気なのか。

それだつたらお言葉に甘えておきたい。

「……はい、まあ……すみません」

なぜか謝ってしまった。

つくづく自分が臆病だと感じる。

「……いいわよ、教えてあげる」

そう言った暁子が、少し暗い目をしていたのは気のせいだっただろうか。

それから暁子は静かに話し始めた。

その出だしは衝撃的なものだった。

「私、……“鳴海暁子”じゃないの」

「……はっ？」

朔夜は思わず素っ頓狂な声を上げた。

鳴海暁子じゃない、と言うことはこの目の前で話しているのは誰だ。謎が分かんと思いきや、また謎が深まった気がする。

「体は暁子だけど、魂は暁子の姉、奈津子なの。」

朔夜の頭の中に次々とクエスチョンマークが増えていく。よく分からない。

何を言っているんだ、こいつ。

「私は奈津子だけど、暁子の体を借りてるの」

そんな朔夜の様子を察したのか暁子はそうまとめた。

なんとなく分かったような、分からないような。

まだ困惑する朔夜を見て、暁子はため息をつく、その旨を語り始めた。

つまりはこういうことらしい。

奈津子と暁子は姉妹であった。

ある日、姉の奈津子は自殺を図った。

しかし図ったはいいものの、

友達の多い暁子が羨ましくなった。

一度は経験したかった。

その数日後、暁子は交通事故にあった。

奈津子はチャンスと言わんばかりに暁子の体に入り、

暁子の生活を楽しむことにしたらしい。

暁子の体に危害が加わろうとしたとき、守ってくれる。

あの光を出したのも、幽霊の暁子だと言う。

「そんなことできんの……？」

「……できたから私がいるんじゃない」

暁子、いや奈津子はしれつと言った。

なんとなく、最初とは印象が違う。

「そんなくらい言えればあいつらにも対抗できただろ」
そう、そのはずだ。

結構強気な発言ばかりで、朔夜自身圧倒された。

「……言えれば、ね……」

そう言っていると暁子は歩き出し、朔夜の横を通りどこかへ行ってしまった。

謎は解けた、と言ってもいいのだが、
なんとなく引つかかる。

自殺を図った人間が、もう1回この世界に生きたいと思うのか。
そもそも、その自殺の原因も分からない。

さらに、本物の暁子が守ってくれる、と言ったが、
本物の暁子はそれでいいのだろうか。

体を返してほしいと思わないのか。

少しずつ、糸は解けていくのに
どこかでまた絡まる。

暁子が嘘をついているということもありえないことではない。
そう思いながら家へ帰り、その日は早く床についた。

朝になったらしい。

目覚し時計が先程から鳴り響いている。

朔夜はまだ少ししか寝ていない気がする。

でも、学校と言う規則には逆らえず、しぶしぶ時計を止めた。
どんなに考え事しても時間は待ってくれない。

朔夜はそう実感した。

今日もまた曇り空だった。

眠い目をこすりながら学校へ行くと、
教室の前に少しの人だかりがある。

気のせいかな、みんなくすくす笑っている気がする。

朔夜はなんとなく取り残された気分だった。

なんとなく不安になり、ドアのガラスから覗いてみた。

初めに暁子の机が目に残った。

そこには、ほかの机にはない、マジックで書かれた落書き。汚い言葉が書き連なっている。

誰がこんなこと、と思ったが、一瞬にして分かった。

昨日のやつらだ。

呼び出すといい、机に落書きといい低レベルなやつらだ。

「始まったな、転校生いじめ」

そんなことを思っていると、直哉がひよつこりと顔を出した。本当は昨日から始まったのだが言わないことにした。

「……そうだな」

直哉は興味があるらしく、何分も見えていたらしい。

好奇心旺盛、という言葉は直哉のためにあるような気がする。

それからまた直哉は自慢の口で「転校生論」を展開した。

転校生は可愛くて、明るくて、頭も良くて……など

ただ単に自分の理想を喋るだけのことだ。

聞いたことのあるような内容だが特につつまなかった。

その最後に、直哉は付け足した。

「……でもさ、あいつも損な奴だよなあ。仲良くしておけばいいのにさ」

それは朔夜も同意見だった。

そう直哉が言い終わったとき、

丁度暁子が真新しい鞆を背負いやってきた。

こんなことになっているとは知らないものの、

人だかりの嘲笑うような視線を察したのか眉間に皺を寄せた。

暁子は人の波を押し避け教室に入っていた。

人だかりや昨日のやつらは遠くからその様子を眺めている。

朔夜も例に漏れず、気にはなるものの助けたいとは思わなかった。

暁子は自分の机の異変に気づくと、

教室全体を睨むように見た。

そしてその真新しい鞆を投げるように置き
すたすたと教室を出た。

暁子がいなくなるとさっきまで静かだった教室が一気に沸き、
昨日の女子を中心に暁子の悪口を言い始めた。

朔夜はと言うと、無意識のうちに足が暁子を追っていた。

「おい、どこ行くんだよ?!」

直哉の呼び止める声も耳に入ってこなかった。

直哉は追いかけてようとしたが、

まもなくホームルーム開始のチャイムが鳴り、
追いかけるに追いかけれなかった。

朔夜が追いついたところは屋上前の階段だった。

「……待てよ」

案外足は速いらしく、少し走ってやっと追いついた。

朔夜は階段の下の方、暁子は上の方にいる。

暁子は足を止め、顔だけ振り向いた。

あの時と同じ、暗い目をしている。

「……何」

暁子は朔夜をじっと睨んだ。

金縛りにあいそうな、鋭い視線だった。

「……なんで言い返さないんだよ?」

昨日の調子だったら言い返せたはずだ。

こんなことされて悔しくないのか。

「……五月蠅い」

暁子はボソツと呟いた。

朔夜はその声を聞き取れず、再度問い掛けた。

「悔しくないのかよ?!」

「……悔しいわよ……」

その時、どこからか体育倉庫のときのような光が現れた。

目を瞑るうちに、体がよろけて、倒れる感覚が記憶に残っていた。

目が覚めたのはベッドの上だった。

どうやら保健室らしい。

ゆっくり体を起こすと頭に鈍痛が走った。

「あら、起きたの？」

暫く頭を抑えていると、その様子に気づいたらしく

保健の先生が言った。

先生の話によると、朔夜は保健室前の廊下に倒れていたらしい。いったい誰が運んだのか。

暁子が運んでくれたのだろうか。

そして、もうひとつ疑問がある。

何故、あの時また光が出たのか。

暁子、いや奈津子は、

「本物の暁子が暁子の体に危害が加わろうとしたとき守る」。

そう言ったはずだ。

朔夜は何も危害を加えようとしていない。

光の理由は何だったのだろう。

ベッドの上で痛い頭を抱えながら考えた。

しかし、答えは出ない。

……キーンコーンカーンコーン……

その時、チャイムが鳴った。

朔夜は時計を見て驚いた。

「……終礼?!」

「ああ、あなた凄く眠っていたわね」

先生はふふ、と笑った。

凄くどころじゃない。

学校に来て、暁子を追いかけて、ホームルームにも出ていない。

授業を受けないまま、1日が過ぎてしまった。

朔夜は軽く愛想笑いして、窓を眺めた。
相変わらずの曇天。

雨が降ってしまえばすっきりするだろうか。

「……最近曇りばかりね。明日は晴れるといいけど」

「……そうですね」

分かっていたはずだった。

雨が降らないと雲がなくならないことを。

例え、それが雲でなくても。

朔夜は複雑な気分で下校することとなった。

学校に行ったはいいが何も受けずに帰るとは。

ラッキーなことなのは分かっているが、

なんとなくみんなに悪いような気もする。

変なところでお人好しなのである。

朔夜は疲れていた。

ずっと寝ていたけれど、十分に気疲れしている。

ふらふらしながら家へと急いだ。

朔夜の家は学校から徒歩15分。

光陵学園には初等部から通っているので

家から近いのが嬉しいことだった。

家へ着き、鍵を開けようと思い鞆をあさった。

「……ない。いつものところには無かった。

フアスナーを開け細かいところまで探した。

嫌な予感がする。

朔夜の嫌な予感は外れたことが無い。

「……やっぱり、鍵がない。

朔夜はため息をつき、母の勤める病院へと向かった。

朔夜の母は看護士で、橘総合病院に勤めている。

結構大きい病院で、この辺ではここくらいしか大きい病院が無い。
そのため人の出入りも少なくないようだ。
家から歩いて約20分。

先程までの距離よりも長いことを呪った。
おまけに、病院の前には上り坂があり、
その上にそれは建っている。

早く休みたいのに、辿り着けない。
何かに呪われているのだろうか。

そんなくだらないことが頭の中を駆け巡った。

やつのことで坂の前まで来た。

既に疲れきっていて、どこかに早く腰掛けたかった。

しかし、人のいるなかで路上に座り込むわけにもいかず、
上ることしかない現実を思い知らされた。

朔夜は息を切らしながら坂を上り終えると、
まるで自分が病人のような気がしてきた。

坂と言っても、車椅子用の緩やかな坂なので

さほど支障は無いはずなのだが、朔夜にとって地獄そのものだった。
自動ドアが音を立てて開き、

朔夜はやつと病院に着くことができた。

中は暖かく、思わずため息が漏れた。

しかし、暖まるためにここへ来たのではない。
母親を捜さなければならぬ。

朔夜はそこら辺にいた看護師に母親の居場所を訊いた。

「あら、松田さんの息子さん？松田さんなら5階よ」
5階、と聞くとぞつとしたが、

エレベーターがあるので楽だった。

こういうときに文明の進化に感謝したくなる。

朔夜はその看護師に軽く会釈し、エレベーターへと向かった。
丁度来たところだったらしく、

朔夜は前にいる夫婦と一緒に乗り込んだ。

朔夜が5階のボタンを押すと

夫婦も5階だったらしく、特に何も言われなかった。
なんだか暗い夫婦である。

妻の方は涙目で、今にも泣き出しそうな感じである。

夫の方はそれをなだめるように肩を抱いている。

なんだか嫌な人たちと乗り合わせてしまったかもしれない。
エレベーター内の空気が暗い。

早く着け、と朔夜は祈った。

チン、と機械音がしてドアが開いた。

助かった、と思ったが同じ5階で降りることを思い出し、
また気分が沈んだ。

朔夜はとりあえず降りた。

そう言えば、5階とは言われたけれど、母親はどこにいるのだろう。
朔夜がその場でうろうろしているうちに夫婦は通り過ぎ、
逆に良かったかもしれない、と思った。

しかし、母親を捜さなければどうにもならない。

鍵を貰うために来たのだから。

朔夜はフロア内をうろつくことにした。

どこかにいるだろう、と言う呑気な考えだった。

朔夜が病院内を回ったところ、先程の夫婦が目に残った。

椅子に座って、妻の方は目頭にハンカチを当てている。

見ると、その横には手術室。

暗かった理由が分かる気がした。

朔夜は黙って通り過ぎようとした。

暗い、と思っていたのが済まないような気がしたし、

その割には自分には関係無いからだ。

「……………」

朔夜は振り向いた。

妻の方が確かに言った。

朔夜は立ち止まって、その会話を聞いた。

夫の方は、それをなだめるように言った。

「大丈夫……あきこも生き返ってくれたんだ」

あきこ。

朔夜は言うまでもなく、鳴海姉妹が浮かんだ。

こんな偶然、あるものだろうか。

それに、奈津子は死んで幽霊になって暁子の体に入ったのだ。

奈津子はこの世にいないはず。

病院なんかで名前を呼ぶはずが無い。

凄い偶然があるものだな、と思い朔夜は通り過ぎようとした。

ふと聞きなれた声が聞こえた。

「鳴海さん、ちよつと……」

また朔夜は振り返った。

それが母の声だったのもあるが、鳴海と言う言葉に反応した。

確かに朔夜の母がそこにいた。

その声はしっかりと先程の夫婦に向けられている。

やっぱり、あの鳴海暁子の家族だった。

まだその可能性もあると言えないのに、朔夜はなぜか確信した。

しかし、引つかかるところは先程思ったことである。

奈津子は暁子の体を通して言った。

自殺を図った、と。

自分の体はもう無いから暁子の体を借りたはずだ。

もう一度、学校生活を楽しみたいと言って。

普通、自分の体に戻るはず。

でも格好悪いだろう、自殺して戻ってきた、とは。

そう言えば、あの光は何なのだろう。

ふと思い出したが、気になる。

次々と解ける系はあるけれど、

更に絡まる糸もある。
朔夜は混乱してきた。

朔夜の母が鳴海夫婦の傍を離れると、朔夜は母親に駆け寄った。
母は朔夜に気づいたのか、「あらっ」と声を上げた。

「朔夜！どうしたの？」

「……鍵忘れたんだよ」

「あら、しょうがないわねえ」

ついてきなさい、と母親が呟くように言った。

朔夜は何も言わず後に続いた。

2人はエレベーターに乗り込んだ。

特に話すこともなく、しばらく無言だった。

その沈黙を破ったのは朔夜だった。

「あの夫婦……何があつたの？」

朔夜なりに勇気を振り絞った一言であつたが、

母親はそんなに気にした様子も無く「うーん」と考えた。

「言つていいのかしらね、こういうの。まあいいか」

そう言つて母親は話し始めた。

「あの……鳴海さんつて言うんだけどね、朔夜と同じ年の娘がいるの。暁子ちゃん……だっけ。

でその上に奈津子ちゃんつていう子がいるの。1個上に」

暁子、奈津子。鳴海家……。

暁子が朔夜と同学年だと言つことも同じだ。

やはり、あの鳴海暁子関係だろう。

「それでね、奈津子ちゃんのほうが今あそこにいるの。」

母は顎で手術室を指すと、

丁度エレベーターのドアが開いた。

しかし母親は話すことをやめなかった。

「自殺未遂らしいわ……もともといじめみたいな物とか登校拒否と

かあったらしいけど、
なんで自殺なんて、ねえ」

物騒よね、と朔夜に語りかけた。

朔夜は機械的に頷くことしかできなかった。

自殺の原因。

それは今母親が言いたいじめだろう。

そうだ、だからあのような……言ったら失礼だが、いじめられていたような容姿なのだろう。

しかし、体は暁子のはずだ。

俯いていたのは自分でできるが、

ぼさぼさの髪はもともと暁子のものであったのだろうか。

「その後に暁子ちゃんが交通事故で入院してたんだけどすぐ退院したのよ。」

意識が無くて結構危ない状態だったんだけど、奇跡的に助かってね

……」

それは恐らく奈津子が意識の無い体に乗っ取ったからだろう。
不意に母親が止まった。

朔夜は考えながら母親についていたので、急に止まり驚いた。
見ると、目の前がロッカールームだった。

「鍵、取ってくるから待っててね」

「……ああ」

朔夜がそう返事したとき既に母親は部屋の中にいた。

女性用だから入るわけにもいかない。

腕を組んで待つことにした。

今までの事を整理すると、途轍もなく時間がかかりそうだと
後で考えよう。

そう思ったとき、ドアが開いて母親が鍵を差し出してきた。

「はい。帰ったら勉強しなさいよ」

「……はいはい」

朔夜は適当に頷いて、帰ろうとした。

その時、母親が言った。

「そうそう、暁子ちゃんも自殺だったんじゃないかって言われてるの」

「……なんで？」

「なんかね、人気の無い場所で急に飛び出したんですって。

何かあったのって訊いても答えなかったらしいけど」

「……へえ……」

また考えることが増えた。

朔夜は気がつくとも道路に立っていた。

立っていた、というより、自分が客観的にその道路を眺めている。

人氣が無く、車の通りも少ない。

そんな道路を、訳もなくずっと見ていた。

そこに、1人の少女が歩いてきた。

鳴海暁子だった。

中身は本物のようだ。

しっかりと顔を上げて歩いている。

その暁子は信号待ちをしていた。

律儀にも車の来ない通りを眺めている。

車が来た。

他に車が無いのでスピードを出している。

暁子の待つその横断歩道に差し掛かろうとしたとき、

不意に暁子が飛び出した。

飛び出した、というよりも、押されたと言うほうが正しいかもしれない。

確かに何者かに押され、車の前に飛び出した。

「きゃああああああっ！！」

暁子の甲高い声が通りに響いた。

それとともに、ブレーキ音が鳴り響き、

辺り一帯に鮮血が広がった。

朔夜はぞつとした。

徐々に人が集まってくる。

もう見ていたくなかった。

人が轢かれて、倒れているところを。

しかし、動けない。逃げられない。

目には真っ直ぐその光景が入ってくる。

目を瞑ったそのときだった。

誰かの声が聞こえる。

何を言っているかは分からない。

けれど何かを言っている。

「……けて……」

「え？」

「……お姉ちゃんを……止めて……助けて……」

朔夜ははつと目が覚めた。

「夢……か……」

朔夜はほつとした。

現実ではない気はしていたが、怖かった。

もしあの場にいたら、などと想像してしまう。

それに、夢とはいえ妙にリアルだった。

朔夜は安堵のため息をつき、額の汗を拭った。

それにしても、夢にまで鳴海暁子が出てくるとは。

そこまで深く考えていたのかと思うと、

なんとなく自分が馬鹿らしく思えてきた。

しかし、気になるのは最後の言葉だった。

『……お姉ちゃんを……止めて……助けて……』

なんとなく、本物の鳴海暁子が言った言葉のような気がした。

朔夜は支度を済ませ、学校へと向かった。

今日は生憎の雨だった。しかも、土砂降り。

朔夜のクラスの前まで行くと、ある異変に気づいた。
クラスの前に人だかりがある。

また何かあったのだろうか。

あんな夢を見た後だからなのか、妙に暁子が心配だった。

人を掻き分け、ドアのガラスから中を覗いた。

案の定、教卓の辺りで女子たちが暁子を囲んでいる。

教室内にも人がいて、囃し立てたり傍観している。

その女子の1人が暁子に掴み掛かっていた。

「邪魔なんだよね、あんた。ウザいし」

「死んでよ。生きてても何も意味ないし。ってかマイナスだし」

周りからはクスクス笑う声や野次が飛び交っている。

暁子はその女を睨んだ。

そして、教室を見渡した。

一瞬、暁子が笑った気がした。

凍りついたような笑み。

「……何か言えよ!!」

女子の1人が暁子を突き飛ばした。

その衝撃で暁子は勢いよく壁にぶつかった。

暁子は抵抗していなかった。

その様子を、女子や周りが嘲笑う。

朔夜はハラハラしながらその様子を見ている。

何もできない。

夢の中の誰かの声に応えなくてはならない。

何故だか分からないがそんな気がした。

暁子は手をブレザーの内ポケットに入れた。

手探りで何か探しているようだった。

「!!!」

朔夜は走り出した。

ドアを開け、暁子の方へ。

無意識に、取り憑かれたように、心よりも体が動いていた。
それと同時に、暁子がナイフを出した。

「きゃああああっ！」

女子の1人が叫んだ。

瞬く間にギャラリィは騒ぎ始める。

「やめろよ」

朔夜は暁子の傍に行くと、

ぐっとナイフを持っていてる手を抑えた。

辿り着いてみると、意外と冷静だった。

「……何よ」

凍った目。

今にも人を殺しそうな剣幕があつた。

「やめろって」

敢えて強気で言った。

しかし暁子はちつとも怯まず、逆に朔夜のほうが怯んだ。

「邪魔なのよ……あなたもあいつらも……」

悔しいから復讐してやるんだから!!」

そう叫ぶと暁子は朔夜を突き飛ばした。

朔夜は不意をつかれ、バランスを崩し、教卓に体当たりした。

その揺れで教卓の上の花瓶が倒れ、

朔夜の上に——……

朔夜にはそれからの記憶が無かった。

「……ねえ、良いでしょう？」

ちゃんと代わりはやってあげるから」

どうして？

私の体なのに。

なんでその為に——……？

「……さい、起きて下さい」

朔夜ははっとした。

見ると、顔を覗き込んでいる鳴海暁子の姿があった。

朔夜は寝転がっている。

暁子は今朝の夢の中で見た時と同じ服装だった。

もしかして、この暁子は——……

「本物……？」

暁子は頷き、微笑んだ。

なんとなく、寂しさを含んだような笑顔。

そこで朔夜は確信した。

本物の鳴海暁子だ、と。

朔夜は起き上がろうとした。

頭が痛い。

そう言えば、さっき暁子に押され教卓に体当たりした。

それからの記憶が途切れている。

少し頭の痛みが引くと、ふと思った。

どうして暁子の姿が見えるのだろう。

本物なら、幽霊のはず。

もしかして、自分は死んだのだろうか。

「いえ、生きてますよ」

暁子に心が読まれたように言われ、朔夜はどきっとした。

視線を逸らそうとして、周りを見た。

真っ白の世界だった。

視界を遮るものはない。

いや、白く見えているものが視界を遮っているのか、

それとも本当に白く続いて、どこまでも行けるのかも分からない。

「ここは地上の上の世界です。」

雲の上の世界、と言う方が良いかもしれませんね」

天国の一步手前、と暁子は付け足した。

暁子は続けた。

「あなたの意識をここへ呼んだのは私です。

死んではいません。でも、あなたもある意味幽霊ですね」

幽霊。

そう言われてみると、体が軽いような気がした。

「……呼んだ理由はなんですか？」

「姉から大部分は聞いたと思います。

しかし、干渉されないために嘘をついた部分があります。

……全部、話すために、あなたを呼びました」

暁子はぎゅっと唇を噛んだ。

「姉は生きています」

「……ああ……」

病院で母親から聞いた。

手術室にいる人が奈津子だと言っていた。

「姉は……お姉ちゃんは元々いじめとかに遭っていたみたいで、

ずっと家にいました」

朔夜はごくりと唾を飲んだ。

やっぱり、原因はいじめだったのか。

暁子の様子を見ると、少し緊張してきた。

眉間に皺を寄せ、呆れているような、哀しそうな、そんな表情だった。

「ある日、お姉ちゃんは……自殺、して……。

私が部屋に入ったときにはもう倒れていて、すぐに病院に運ばれて

……」

暁子はぎゅっとこぶしを握り、

「自殺」と言う言葉に力を込めて言った。

少しずつ声が掠れてきたのが分かり、痛々しかった。

「一命は取り留めたって聞いていたんですけど、

突然幽霊のお姉ちゃんが現れて、『もう一度生きたい』って……」

暁子は涙が零れそうになるのを必死で抑えながら話を続けた。

朔夜は何もできない自分がもどかかった。

「それで、お姉ちゃんも死んでない、体に戻ってっていったのに、自分が死んでないことに気づいてないみたいで、戻る場所なんて無いって……」

奈津子のその言葉には、多分、強がりも入っていただろう。

もし死んでいなくても、自殺した身で、

あつさりと戻れないと思ったのかもしれない。

朔夜は嗚咽が混じり始めた暁子の頭にそつと手を置いた。

この嗚咽が悲しみなのか奈津子のことを思ってたのかは分からない。しかし、朔夜がこの姉妹を助けたいと思ったのは本当だった。

「それで私が交通事故にあつて、でもそれはお姉ちゃんが私を押したみたいで……」

私の魂が抜けてる時にお姉ちゃんが入ってきて、乗っ取られて……」

暁子はごしごしと手の甲で涙を拭くと、顔を上げた。

赤い目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「私がどうしてこんなことするのって聞いたら、

……復讐するためって言ったんです、いじめた人たちに……」

そしてまた顔を下げた。

朔夜はなんとなく、光の理由が分かった気がした。

本物の暁子だということは分かっていたが、

多分、暁子は自分の体を守ろうとしたのではない。

奈津子が相手に危害を加えそうになったとき、

目くらまし、というのだろうか。

その代わりにしたのだろう。

しかし今朝は多分今の暁子では太刀打ちできなかったのだろう。

あの時の暁子は、オーラが、表情が、全てが違った。

「お願いします……お姉ちゃんを助けてください……」

夢を見せたのは、暁子だろう。

自分ではどうにもできないから、助けを求めたのだろう。

一番最初に気づいた、朔夜に。

朔夜は暫く間をおいて、はっきりと言った。

「……はい」

「……では、体に戻ってください。」

『戻りたい』と思えば戻れます。多分……体も限界でしょうから
ようやく暁子が落ち着き、頭を下げながら言った。

朔夜も意味無く会釈した。

「……頑張ってください……お姉ちゃんを救ってください」

朔夜は「はい」と頷きながら言うつ

『戻りたい』と念じた。

すると急な下降感とともに意識が飛び、

体の重みと病院の消毒液の臭いを感じた。

ゆっくり目を開くと、目に飛び込んできたのは

母親と直哉だった。

直哉は見舞いに来たらしく、籠いっぱいの果物を持っている。

「朔夜?!」

2人と目が合うと、母親が声を上げた。

母親は朔夜の腕を掴み、ゆさゆさと揺らした。

その後ろから直哉が顔を覗かせている。

「目が覚めたのね……!」

「朔夜あ……無事だったんだなあ……良かったよ」

直哉はそうでもなかったが、母親は今にも泣き出しそうな勢いだっ
た。

ふと暁子の姿がよぎって、少しどきつとした。

夢だったような気がする。

本物の暁子が助けを求めたこと。

ちゃんとここに身体がある分、余計に信じられなくなる。

しかし、約束したことは守らなければいけない。

例え夢だとしても、そう思った。

「……朔夜？」

反応が無かったためか、母親が様々な角度から覗いてきた。はっと我に返ると、「ああ」と適当に相槌を打った。それすらも嬉しいようで、母親は朔夜を抱きしめた。直哉の前で恥ずかしい気もしたが、自分を愛してくれている証拠なんだろう、と思うことにした。

「それでさ、鳴海暁子さ……」

母親がトイレに立ったとき、

直哉が朔夜が倒れた後の話を始めた。

「お前の頭に花瓶が落ちて倒れた後さ、あいつ震えててさ……」

悪気は無かったみたいだけど、一応先生たちに連れて行かれたよ」

「そりゃあそうだろうな……」

「でさーもう教室大騒ぎ！授業どころじゃなくてさ……」

まーでも俺にとっては良かったけどさ」

直哉は苦笑しながら言った。

そして「でもお前のことは心配だったんだからな！」と慌てて付け加えた。

「それで……まあ少し様子見ようってことで。」

あの女子たちがお前を盾にして鳴海暁子が悪いってことにしようとしてたけど、

相手も悪かったわけだからそんなに鳴海暁子を責めるなって。

それで終わったよ」

「はあ……」

つまり朔夜の決死の行動は流されたということだろうか。なんとなく悲しいような悔しいような気持ちだった。

「まあお前は勇者だよ。よっ、勇者！」

そんな様子を察したのか直哉が拍手しながら言った。

朔夜がそれに苦笑すると母親が戻って来た。

「朔夜、先生がね、検査して異常なかったら

もう明日にでも退院できるって言ってたわ」

「……へー」

朔夜がそう返すと、母親は

「この子は愛想が無いんだから」と呟いた。

先程までの溺愛ぶりは何処へ行ったのだろうか。

暫くして主治医がやってきた。

男の、比較的若いであろう医師だった。

検査をすると言われ、朔夜はどこかに連れて行かれることになった。

「あの……何時間くらい眠ってたんですか？」

「君？君は2日眠ってたんだよ」

「2日?!」

朔夜が驚くと、主治医はふつと笑った。

「何時間」のレベルでは無かった。

最近は自覚なしに長く眠ることが多いな、と

朔夜は変なことを考えながら検査を受けた。

検査の結果、異常が無いと判断され、

朔夜は退院することになった。

母親が早番で、そのついでに

早朝に病院を出ることになったので、

今日から学校に行くことが出来る。

母親は「休めば？」と言ったが、

朔夜にはやることがあるので休めなかった。

暁子との約束を果たすこと。

朔夜が学校に着くと、クラスメイトからの視線が集まっているのが分かった。

それは今までとは違う眼差しだった。

「よお、勇者」

直哉が後ろから顔を覗かせた。

朔夜は「勇者じゃないって」と小声で反論した。
もしかして、その視線が示すのはこの間の出来事のせいなのか。
気分のいいような、恥ずかしいような、妙な気持ちだった。

暫くすると、暁子、いや奈津子がやってきた。

暁子が少し顔を上げた時に朔夜と目が合った。

暁子は視線を逸らすようにまた俯き、自分の席に座った。

朔夜は暁子の席へ向かった。

「……話、あるんだけど」

暁子はまたちらつと朔夜を見た。

「……何？」

その声は冷たい声では無く、
むしろ開き直ったような、「責めるなら責めて」と言うような声だった。

「ここじゃなくて……じゃあ、屋上で」

そう言うのと朔夜は無理矢理暁子の手を引き、

屋上へと引っ張った。

暁子は最初抵抗してそこに留まろうとしたが、
階段の辺りにくると流石に諦めたのか大人しくなった。

「……離してよ」

屋上の手前で暁子が言った。

ここまで来たなら逃げないだろうか、と思い、

朔夜が手の力を緩めると、暁子は手を振り払うように解いた。

案の定、暁子は逃げなかった。

「……この間のこと？」

暁子が引っ張られた方の手を触りながら、

朔夜を睨み、そう言った。

「いや、……そうじゃなくて」

いざ言うとなると、どう言ったらいいか分からない。

「本物の鳴海暁子と会った」と言ったら変人のように思われそうだし、暁子は無理矢理呼ばれたのが気に入らないらしく「早く話せ」と言わんばかりの目をしている。

「あの……さ、あんたの体の持ち主……に、会ったんだよ」

「……そう」

朔夜が言っていると暁子は表情を変えた。

変えた、と言うよりも、

同じ睨むような表情だったが、感情の無い目になった。

「それで……聞いたんだけど」

そう朔夜が言っていると暁子は向きを変え、もと来た道を帰ろうとした。

「おい?!」

「……聞いたならいいじゃない。何で私を呼んだの?」

そう言つて振り向いた暁子は朔夜を睨んでいたが、

少し悲しそうに見えた。

「……なんでここ……この世界に戻ろうとしたんだよ?」

本物の暁子は、復讐のためだと言っていた。

しかしそれは推測でしかなく、本当のところは分からない。

ずっと気になっていた。

どうして自殺した人間がこの世に戻ろうと思ったのか。

「……悔しいじゃない。やられたままなんて」

暁子はあっさりとそう答えたが、朔夜には納得できなかった。

「でも、あんたは……決してやり返そうとしてなかった。

ナイフは持つていたけど、あの時俺や女子たちを刺すことも何でも出来たはず」

朔夜がそう言った途中、チャイムが鳴った。

ホームルームの始まりのチャイム。

チャイムが鳴り終わると、暁子は眉間に皺を寄せ、ぎゅっと目を閉じて、俯いた。

「……愛されたかったんだろう?」

暁子の体がビクッと震えた。

「愛されたかったから、この体を借りた。

……多分、『鳴海暁子』になりたかったんだろ。

『鳴海暁子』は『鳴海奈津子』とは違ったから。

でも、転校しても、変われなくて……結局あんなっちゃったけど……

……」

気がつくとき暁子はその場に崩れていた。

涙を流して、肩を震わせながら。

奈津子の心は覗けない。

しかし、その行動が奈津子の心を物語っているようだった。

「……何で……分かったの……？」

やっぱり、そうだった。

手を挙げなかったことも、やり返さなかったことも。

全て自分がそうして欲しいから。

でも多分、心が不安定だったから、

自分がコントロールできないときもあったのだろう。

無表情の奥に自分を隠して、守っていたのかもしれない。

「……ちよつとついて来い」

朔夜はそう言って暁子の手を引いた。

「……どこ行くの……？」

2人は学校の外へ出た。

朔夜は誰かに見つからないかとひやひやしていたが、

ここまで来た手前、今の奈津子に弱気な姿は見せられなかった。

「……着けば分かる」

そう強気で言っておくと、奈津子はいまいち腑に落ちていない様子だったが

黙ってついてきた。

着いた先は橘総合病院。

朔夜は母親が居ないか心配だったが、

今日は仕事が無いと言っていたことを思い出した。

「……」

動揺している奈津子を引いて、エレベーターに乗り込んだ。そして、迷わず5階のボタンを押した。

暫く無言だったが、奈津子が口を開いた。

「何のつもり？ 私はもうここには居ないんだけど」

そう言えば、自分が死んだことに気づいていないと言っていた。演技なのかもしれないが、本当に気づいていないらしかった。

「……あんたは生きてる。ここの病院の手術室で今も生きてるんだよ」

奈津子は、嘘、と驚いたような顔を見せ、それからまた俯いた。

「……きつと……『生きて愛されたい』って言う思いが今の体を生かしてるんだよ」

そう朔夜が言うと、チンとエレベーターが音を立て、開いた。朔夜が降りると、少し遅れて奈津子が降りた。

また泣いているらしく、少し震えながら朔夜の後続いた。

少し迷いながらも着いたのは、あの手術室の前。

案の定、鳴海夫妻がそこに居た。

「暁子？！どうしたの？」

妻、奈津子にとっては母親が掠れ声で言った。

そう言えば、学校を抜け出して来たのだ。

気にするのも分かる。

「……なにやってるの……？」

泣き止んだ暁子、いや奈津子が震える声で言った。

「……奈津子が、頑張ってるから……応援しているんだよ」

父親が母親の代わりに言った。

そして、暁子には言っていなかったけど、と付け加えた。

「……いつも……？」

「ああ、仕事の中休みに……毎日。
いつ帰ってきてくれるか……分からないからなあ……」
父親の声もだんだん掠れていくのが分かった。
するとまた奈津子は下を向いた。

愛が、伝わっただろうか。

ただ1人の部外者は、そつとその場を去った。

次の日、朔夜は暁子、いや奈津子に屋上に呼び出された。
帰る決心がついたという。

「色々……ごめんなさい」

奈津子が頭を下げた。

改まるとなんとなく照れた。

「そう言えば……どうしてこんな時期に転校してきたんだよ？」
最後の疑問。

朔夜は思い切って訊いてみた。

「……2人とも入院していたでしょう、あの病院に。
それで、病院に通うのも大変だし、異常があつたら困るから……
だからこの病院の近くに來たのよ。」

でも暁子の体は入院していたから、時期がずれたの」

そう答えた奈津子は今までよりも明るく見えた。

昨日のせいで少し目が腫れているが、あまり気にならなかった。

「へー……」

また愛想の無い返事をする、奈津子は上を向いた。
今日は快晴。

久しぶりに見た雲ひとつ無い天気だった。

「じゃあ……さよなら」

「ああ」

「……また……会えるかな」

奈津子は疑問系のような自分に言い聞かせるような
そんな風に言った。

「会えるよ。……生きてれば」

そう朔夜が言っていると、暁子が笑った。

初めて見た笑顔。

しかしそれは暁子の顔ではなく、まだ会ったことの無い奈津子の顔
に見えた。

「……ありがとう」

そう言っていると、暁子の体がへなつと崩れた。

どうやら在るべき場所へと帰ったらしかった。

「さよなら、鳴海暁子の奈津子」

人は愛される限り、愛を必要とする限り、生きていける。
晴れた空が、笑った気がした。

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！

何か感じてもらえれば幸いです。

<http://id35.fm-p.jp/23/rikama/>
でも同じものが置いてあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3498b/>

時期はずれの転校生

2011年1月12日22時11分発行